

『青春の自省録』

【推薦の御言葉】

■天川さんの『青春の自省録』出版によせて

作家 神渡良平

青春は自分の外に展開している世界に興味を抱き、探索し、挑戦する時である。時に無謀ともいえるような夢を語り、「俺の力量を見よ！」と言わんばかりにもする。

精神的にはまだ未熟であったとしても、そこには挑戦する者のひた向きさがあり、キラキラ輝くものがあり、それが青春の特権だといえる。

青年は目標を達成した時、雄叫びを上げ、勝利の美酒に酔いしれる。しかし時として手痛い打撃を受け、苦渋に満ちた挫折を味わいする。そうしたさまざまな経験を経て、だんだん自分の力量と世界がわかり、次第に自分独自の人生観や世界観を形成していく。

青春とはまさに気も尽き果てるような浜の真砂の中から、自分という至極の宝石を探し出す時なのだ。まだ原石でしかなく、きらめくような光は発していないかもしれないが、秘めたる可能性を見出し、確かな手応えに打ち震える――。

本書は、私よりもはるかに若いものの、かねがね畏友として尊敬している天川貴之さんの二十歳前後の大学生の頃の思索の跡である。大学生といえば、前述のように外に興味が向かう頃なのに、天川さんの眼は宇宙空間に広がるを仰ぎ、心に広がる内面の世界をしっかり見詰めていた。本書を読んでみて、天川さんは何と老成していたのだろうと驚嘆する。天川さんが後年光を発するようになる兆しを、私はこの自省録の中に見る思いがする。

たとえば次の一節。

人生には「追う」か「逃げる」か、いずれしかない。
その中間がないものである。
あなたは、人生から逃げて逃げて、
弱々しい暗闇の中にたどりつきたいのか。
それとも、人生を追って追って、
神々しい光明に満ちた繁栄を獲得したいのか。

親鸞の心の機微を描いた名戯曲『出家とその弟子』や『愛と認識との出発』を書いて一世をした倉田が、青春の思索を振り返り、『青春の息の』という本を出した。高校生の私は大いに共感してむさぼり読んだものである。本書を手にしてその頃を

思い出し、私もまた内省のひと時を持った。いい本を出してくださったことを、心から感謝する次第である。

■推薦の言葉

林 英臣(東洋・日本思想家)

歴史を研究すると、「ある使命を担うために生まれてきた」としか思えない者がいることに気づかされる。

人類全体の知性向上。それが、東西文明の交代期にあたって、日本人が担う大使命である。深い人間観察力と、大きな人間愛を有する天川学長は、まさに、その使命達成のために、天から遣わされた新進気鋭の哲学者なのだろう。

良書との出会いには、人との出会いに負けないくらいの価値がある。良い本に出会い、ページを開くごとに自分の心も開かれていく。読後には、スッキリと精神の解放と高揚を味わえる。本書はまさに、その典型と言うべき良著と思う。

また本書は、どのページを開いても、大切な気付きをいただける構成になっている。ちょうど開いたページから、その日その時に必要なメッセージを発見できる。そんな読み方も楽しめるに違いない。

現象的に激しい変化が続発するこの時代、感受性の強い人ほど心が傷ついてしまう。理由が分からないまま不安に襲われたり、特別な不満がないまま淋しくて仕方がなかったり…。

それはきっと、何か大切なことと出会うための試練に違いない。あなたには、あなたにしかできないことがあるはず。その使命を発見する大切なきっかけを、本書が与えてくれると信じている。

【帯の推薦の言葉】

これは自分の内に光り輝く珠玉を
発見させてくれる本だ 神渡良平

本書を推薦します！

説明できない不安がありませんか？
特に不満があるわけではないのに淋しい。
それなのに、誰よりも深く傷ついてしまうのはなぜ。
それは、大切なことに会うために与えられた感性かも。
きっと、あなたにだけ見つけられる「宝物」があるはず。
その答えが、本書に眠っています。

林 英臣（東洋・日本思想家、松下政経塾一期生）